

# 「ポスト・リーマンショック文学」として読む Stephen King の "Premium Harmony"

藤 田 眞 弓

Literature After the 2008 Financial Crisis:  
Reading Stephen King's "Premium Harmony"

Mayumi FUJITA

## 要 旨

本稿の目的は2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件がその後のアメリカ文学に大きな影響を与えたように、2008年9月15日のリーマンブラザーズの経営破綻に端を発する世界規模の金融危機が文学に影響を与えたと考え、「ポスト・リーマンショック文学」（仮称）という文学カテゴリーを提唱することである。「ポスト・リーマンショック文学」（仮称）の定義を提案し、サブプライムローン危機がアメリカの片田舎の一組の夫婦に落とす暗い影を描いた Stephen King の短編小説 "Premium Harmony"（2009）を、主人公夫婦とその飼犬の関係性に注目しながら「ポスト・リーマンショック文学」（仮称）として分析する。

キーワード：アメリカ文学、短編小説、Stephen King、リーマンショック

## 0. 序

今年2018年（本稿執筆時）は世界中を金融恐怖に陥れたリーマンショックから10年目の年である。このため、2018年の9月頃から日本でも新聞、雑誌各紙で「リーマンショックから10年」と題された特集が数多く組まれた。例えば、『ニューズウィーク日本版』の9月25日号は「リーマンショック10年危機がまた来る」と題して、リーマンブラザーズの経営破綻からの10年を振り返り、この金融危機がいかに世界の情勢を変えたのかを詳しく解説している。産経新聞は9月12日から5回に渡り、「リーマン10年危機後の世界」と題した連載を掲

載した。この世界規模の金融ショックは「経済格差の拡大を通じて大衆の政治意識をも変え、今日の孤立主義とポピュリズム（大衆迎合主義）に至る時流のパラダイム（構造）転換」となり、「米ウォール街で働く富裕層を尻目に、世界中に「ミニマリスト」と呼ばれる人が誕生」するなど、人々の価値観をも変えた（『産経』、2018年9月12日）。

この、アメリカ経済のみならず、世界中の経済や人々の生活、価値観にまで多大な影響を与えた金融危機が、2001年9月11日にアメリカ本土を襲った同時多発テロ事件（以下、9.11とする）がそうであったように、その後のアメリカ文学に影響を与えたと考えることは出来ないだろうか。

本稿は「ポスト・リーマンショック文学」(仮称)を提案することを目指し、サブプライムローン危機がアメリカの片田舎の一組の夫婦に落とす暗い影を描いた Stephen King の "Premium Harmony" (2009) を分析する。

## 1. 「ポスト・9.11文学」

「ポスト・リーマンショック文学」(仮称)を提案するに当たって、同じく21世紀に入ってからアメリカ全土を震撼させ、その後の世界情勢の在り方を大きく変えることになった9.11以降に書かれた文学、所謂「ポスト9.11文学」がどのように定義されているのか確認したい。

その特徴は大きく分けて二つに分類出来るように思われる。まず、9.11そのものを描いた文学作品、例えば Don DeLillo の *Falling Man* (2007) や Jonathan Safran Foer の *Extremely Loud and Incredibly Close* (2005)、または、9.11以降の世界情勢の激変に強い影響を受けて書かれた作品、例えば Phillip Roth の *The Plot Against America* (2004) や Thomas Pynchon の *Against the Day* (2006) に見られるように9.11を直接描いてはいないがその影響が色濃く作品に現れている文学作品群がある。次に、藤井が指摘するような、9.11以降のアメリカ合衆国の歩みに応答する文学という特徴がある。藤井によると、アメリカ文学は、今世紀に入って「ターミナル化」しつつある、つまり「次第に「アメリカ」という主題から離れ始め、どこか無国籍な雰囲気漂わせる幻想や奇想を中心に物語を作り始めている」(20) のだと言う。

上岡が『テロと文学—9.11後のアメリカと世界』の中で述べる通り、「ある意味、2001年9月11日以降に書かれた小説は全て“ポスト9.11小説”である。特に現代社会を描こうとするもの、現代人の心性にメスを入れようとするものなら、9.11がどこかに影を落とさずにはいられない」(240) のである。上岡はこの著書の中で、9.11から約10年間に発表された文学作品を主な考察の対象として

いる。これらのことを踏まえると、「ポスト9.11文学」同様に少なくともリーマンショックから約10年以内に書かれた小説はリーマンショックがどこかに影を落とさずにはいられないのではないだろうか。

## 2. 「ポスト・リーマンショック文学」(仮称)の成立に向けて

「ポスト・リーマンショック文学」(仮称)というものが成立する為には、複数の文学作品に於いて如何にリーマンショックそのもの、またはその影響がテキストに表象されているのかを検証し、そこに共通点や類似する傾向を見出さなければならぬ。これに加えて、この文学カテゴリーを成立させる為、筆者はポスト・リーマンショック的文学テキストの読み方を提唱したいと思う。

ポスト・リーマンショック的文学テキストの読み方とは、リーマンショックに端を発する世界金融恐怖を経験、目撃した文学者が、その影響の表象を文学テキストに探るのみならず、2008年以前に書かれた作品に於いてこの金融危機やそれが人々に与える影響を予見しているテキストにも注目することである。

このような読み方を援用すると、Don DeLillo の *Cosmopolis* (2003) はまさに「ポスト・リーマンショック文学」(仮称)と呼ぶことが出来るだろう。*Cosmopolis* は2003年に発表され、その物語は Erick Packer という青年の1日(2000年の4月に設定されている)を追う。従って作品の発表はリーマンショックの5年前、物語の設定は8年も前のことになる。しかし、そこに描かれる、テクノロジーを駆使した資産運用、異常なまでの投機熱(その対象は日本円である)と、これらによってもたらされる主人公の身の破滅は、2008年のリーマンショックとその後の世界情勢をまるで予見しているかのような内容なのだ。*Cosmopolis* には、まさに過剰な規制緩和やサブプライムローンに代表される複雑なデリバティブ商品の売買に沸き、やがて金融危機に陥った2008年のアメリカ経済の姿があり、そこに描かれてい

るのは「グローバル資本主義の悲劇ではなく、世界の崩壊それ自体」(青木 47)であるのだが、これこそが「ポスト・リーマンショック文学」(仮称)の特徴と言えよう。更に注目すべきことは、原作に惚れ込んだ David Cronenberg により2012年、つまりリーマンショックの後に本作は映画化されている。原作と映画版には9年のタイムラグがあるので、変更されている点が幾つかあるが(例えば、原作では投資の対象になっているのは日本円であるが、映画版ではその対象は中国元である。これは現在であれば仮想通貨に変容されるのだろうか。), *Cosmopolis* に関して興味深いことは、我々は2003年に文学テキストとして本作をリーマンショックの予言書として読み、2012年に映像テキストとして本作に於いてリーマンショックの影響が如何に表象されているのかを見ることが出来るということである。

まとめると、「ポスト・リーマンショック文学」(仮称)とは、文学作品に於いてリーマンショックそのもの、またはその影響がテキストに表象されているもの、もしくは2008年以前に書かれた作品に於いてもこの金融危機やそれが人々に与える影響を予見していると考えられる文学テキストを含むものと定義をしたい。

### 3. 「ポスト・リーマンショック文学」 として読む Stephen King の "Premium Harmony"

ここからは、リーマンブラザーズの経営破綻が一般の人々の生活に影響を及ぼす様を描いた Stephen King の "Premium Harmony" を「ポスト・リーマンショック文学」と位置づけた上で分析する。

"Premium Harmony" は *The New Yorker* の2009年11月9日号に掲載され、日本語の翻訳は若島正監修『ベスト・ストーリーズⅢカボチャ頭』(2016)に藤井光訳が収録されている。本作の特徴は訳者による作品紹介にこの上なく簡潔にまとめられているので、ここに紹介したい。

「プレミアム・ハーモニー」は二〇〇九年十一月に発表された。舞台はメイン州キャッスルロック、キング作品に繰り返し登場する架空のsmall town である。二〇〇七年から深刻化した、サブプライム住宅ローン危機を背景として、アメリカ経済の失速が、夫婦間の「ハーモニー」に落とす暗い影を、キングは静かな不気味さとともに描き出している。(322)

主な登場人物は、結婚10年目を迎える Ray Burkett と Mary Burkett, そして彼らの飼犬ジャックラッセルテリアの Biz (推定年齢10歳未満) である。夫の Ray は38歳で高校の用務員 (janitor) をしており、妻の Mary は35歳で、彼女の仕事についてはテキストで一切言及されることがないことから、専業主婦ではないかと推定される。

*The New Yorker* 本誌掲載で5ページ(広告を含む)、発行元である Condé Nast 社がウェブサイトで提供する PDF 版で10ページ程度の短編である本作は2000年代のアメリカのリアルな現状に溢れている。地方都市の衰退 ("It's [Castle Rock] pretty dead. What Ray calls 'the economy' has disappeared from this part of Maine.") (69) と大手流通チェーンの台頭 ("The Wal-Mart has its own spotlight. People joke about it.") (69)。そして、サブプライムローンにより分不相応な不動産を購入するも、アメリカのバブル経済崩壊後は家の売却を余儀なくされ、一文 (penny) を惜しむ生活を送る夫婦。

They're going to Wal-Mart for grass seed. They've decided to sell the house — they can't afford to keep it — but Mary says they won't get far until they do something about the plumbing and get the lawn fixed. She says those bald patches make it look shanty Irish. It's because of the drought. It's been a hot summer and there's been no

rain to speak of. Ray tells her grass seed won't grow without rain no matter how good it is. He says they should wait. (69)

物語は夫婦が、Wal-Mart に芝生の種を買いに行く途中に、Mary の姪のプレゼントを買いに Quik-Pik というスーパーマーケットに車で向かう場面で始まる。後部座席には飼い犬の Biz を乗せている。(Quik-Pik に寄らなければならないのは、Mary によると Wal-Mart には姪の好きな紫色のキックボールが無い可能性が高いからである。) 物語は 8 月のある暑い 1 日の、たった 2 時間の間に、夫婦と犬の人生が激変する様を描いているが、この短時間での人生の激変というのも、DeLillo の *Cosmopolis* 同様のテーマであり、「ポスト・リーマンショック文学」の要素のひとつと言えるかも知れない。

本作を「ポスト・リーマンショック文学」として読む為に、本稿では飼い犬 Biz に注目する。先ずはその名前である Biz とは business (職業, 商売, 商業) のことであるのだが、愛犬の名前として相応しいとはどうしても思えない。

He thinks it might be different if they'd had kids, but she couldn't. They finally got tested, and that's what the doctor said. It was her problem. A year or so after that, he bought her a dog, a Jack Russell she named Biznezz. She'd spell it for people who asked. She loves that dog, but now they argue anyway. (69)

ここには、Biz が社会化され、人と人とのコミュニケーションの潤滑油としての飼い犬に課された役割を果たせていないことも読み取れるのだが、ここで、四方田『犬たちの肖像』の第 9 章「犬をどう名付けるか」に於ける犬の命名に関する興味深い論考を紹介したい。

四方田は、実存する文学者とその飼い犬の名前の由来を列挙し、その傾向として、文学者は自身

が好んだ文学作品や神話、伝説の英雄に因んで犬の名前を付けることが多いことを指摘している。例えば夏目漱石の愛犬 (と呼んで良いかどうかは議論を要するところではあるが) の名ヘクトルは『イリアス』、『オデッセイア』の英雄に由来している。続いて、四方田は犬の命名に一般的な規則があるのかどうかという問題について、レヴィ＝ストロースの『野生の思考』(1962) の分析に基づいてまとめている。犬には犬籍簿の登録名と飼い主が付ける「愛称」の二通りの名前が与えられるとした上で、レヴィ＝ストロースはその「愛称」の付けられ方に着目する。レヴィ＝ストロースによると、飼い主が恣意的に付けているように思われる愛称にも実は制約があると言う。何故なら「名前は名付けられた対象を語る以上に、それを名付けた側の人間のことを物語る。こうした事態から導きだされるのは、その犬の名が何であるかではなく、誰がその犬をそう呼んでいるかという問いである」(四方田 172) からだ。愛称の付けかたの法則には大きく分けて三つある。第一に、一目で犬であることが分かる名前を付けること。具体的には競走馬や牧牛に付けられるような名前は犬には付けてはならない。(例えば、「キタサンブラック」、「ウメコ」など。) 第二に、その愛称を使用しても良い条件を備えていること。(例えば、近所の犬と同じ名前は付けてはならない。) 第三に、飼い主の犬に対する考えや好みを反映していること。(先に触れた、夏目漱石の「ヘクトル」はこの部類に属するだろう。)(四方田 168-173, レヴィ＝ストロース 218-19)

"Premium Harmony" の Biz の場合、上記三つの法則のうち、少なくとも第一のものは満たしておらず、仮に第二、第三の要件を満たしているとしても、犬の命名に於いては「名前は名付けられた対象を語る以上に、それを名付けた側の人間のことを物語る」という事実を鑑みた時、愛犬を Biz と名付けた主人 Mary の意図が何処にあるのかは筆者には計りかねる。

Also, he can see Biz still looking at her. He

feeds the damn dog, and he makes the money that pays for the food, but it's her he's looking at. And Jack Russells are supposed to be smart. (69)

この引用は夫 Ray の意識を通して語られているのではあるが、Biz という名が犬の命名の第三の要件を満たしていると考えた場合、この Biz と名付けられたジャックラッセルテリアは金が掛かるものであることが仄めかされ（しかも主人である Mary ではなく、Ray の稼いでいる金によってその生命を維持している）、その存在と金とは切っても切れない関係であることが読者に暗示されているのである。

続いて、このような名前を付与された Biz がテキストに於いてどのような扱いを受けているのかを見て行くことにする。

"I'll get the ball. Then I'll come back. If you still feel you have to spend four dollars and fifty cents to poison your lungs, you can go in. I'll sit with the baby."

Ray hates it when she calls Biz the baby. He's a dog, and he may be as bright as Mary likes to boast when they have company, but he still shits outside and licks where his balls used to be. (69)

ここから、子どもが出来なかった Burkett 夫婦（とりわけ Mary）が Biz に子の役割を付与していることが分かるのだが、これは現代に於ける「動物の在り方」として決して珍しいことではないことが、ドールズ＝ガタリの共著『千のプラトール』（1980）を紐解けば分かる。『千のプラトール』の中でドールズは「動物の在り方」を三種類に分類している。第一に、家族の中で飼いなされた、個体としての動物。（ペットとして飼われる動物。）第二は、形態や性格、属性などによって系統的に分類されたり、神話モデルとして採用されたりすることで、国家や社会に役立つようにさ

れた動物。（例えば動物園の動物たちや、サッカー日本代表のエンブレムの八咫鳥。）第三は、ある環境から別の環境へと移行して行く途上であって、常に群として現象する動物。（所謂野生動物で、ドールズが唯一肯定するのはこの部類の「動物の在り方」のみ。）

Biz が分類される第一の種類についてドールズがどのように述べているのか詳しく見てみたい。

まず最初に個体化され、飼い慣らされた、家族的、感傷的な動物。つまり、「うちの猫」、「うちの犬」など、瑣末な物語に登場するオイディプス的な動物。こうした動物は私たちを退行へといざない、ナルシスの静観に引き込む。精神分析にはこの種の動物しか理解できない。こうして、安心してその背後にパパやママや弟の像を見出していこうというのである（精神分析が動物について語るとき、動物たちは笑うことを覚える）。猫や犬を愛する者は、例外なく馬鹿者だ。(278)

先に挙げた "Premium Harmony" の引用に於いて、Mary が Biz を自分の子どものように扱っている様子が見られることは既に指摘した。これに加えて、この件からは Ray が Biz に犬ならば当然である習性（"he still shits outside"）を認めていないことも読み取ることが出来る。つまりここには、犬である Biz に対する Burkett 夫婦の強烈なまでの人間中心主義的な姿勢が現れているのである。

その後、物語は急転する。Mary は買い物中にスーパーで突如意識不明となり、そのまま帰らぬ人となる。一方、Ray と Biz はエアコンの効きの悪い車の中で、彼女の買い物が終わるのを待っている。次の引用はその直前の Ray が Mary の買い物のために、車を Quik-Pik の敷地に駐車する場面である。

He pulls past the gas pumps and parks beside the store. There's no shade. The sun is



directly overhead. The car's air-conditioner only works a little. They are both sweating. In the back seat, Biz is panting. It makes him look like he's grinning. (69)

エアコンの効かない車内で、人間は汗をかくことにより体温を調節することが可能である一方で、犬の Biz にはそれが出来ない。故に Biz は喘いでいるのであるが、Ray にはその姿がにやにや笑っているように見えているのである。

この後、二人きり（正確には一人と一匹）になった Ray と Biz の描写を、Ray の Biz の扱い方に注目して見て行きたい。

He sits there and she doesn't come out. Ray opens the glove compartment. He paws through the rat's nest of papers, looking for some cigarettes he might have forgotten, but there aren't any. He does find a Hostess Sno Ball still in its wrapper. He pokes it. It's as stiff as a corpse. It's got to be a thousand years old. Maybe older. Maybe it came over on the Ark.

"Everybody has his poison," he says. He unwraps the Sno Ball and tosses it into the back seat. "Want that, Biz?"

Biz snarks the Sno Ball in two bites. (70)

Ray が Biz に与えている "Sno Ball" はチョコレート菓子、しかも「死体のように固く」、「千年前からあるに違いない。もっと前からか。ノアの箱船に乗って運ばれてきたか」と思わせる程古いものである。犬はチョコレートを食べると中毒症状を起こし、大量に摂取すると死に至ることもある、というのは犬を飼っている人間なら誰でも知っている事実である。自身も犬を飼っている筆者としては、10年近く Biz を飼っている Ray がこの事実を知らないとは到底思えず、知っていながらチョコレート菓子を与えているとしたらそこには不注

意を超えた悪意さえ感じられるのである。

続いて、Mary が倒れたことを知らせに来た女性店員について Ray が店内に入って行く場面は次のように語られている。

"Well, something's wrong with her. She fell down. She's unconscious. Mr. Ghosh thinks she might have had a heart attack. He called 911. You better come."

Ray locks the car and follows her into the store. (70)

車は太陽の照りつける場所に駐車されており、その上 Ray は車をロックする時に車のエンジンを切ったと考えられる。

店内で、Mary が搬送されるのを見送った後しばらくの間店に居合わせた人々と飲み食いをしてしながら語り合い、Ray は Mary が車を降りてから2時間が経過していたことに気付く。

He looks at the clock over the counter. It's the kind with a beer advertisement on it. Almost two hours have gone by since Mary went sidling between the car and the cinder-block side of the Quik-Pik. And for the first time he thinks of Biz. (73)

犬を飼ったことのない読者でも、この引用から Biz の死を予見するのは難しいことではないだろう。

When he opens the door, heat rushes out at him, and when he puts his hand on the steering wheel to lean in he pulls it back with a cry. It's got to be a hundred and thirty in there. Biz is dead on his back. His eyes are milky. His tongue is protruding from the side of his mouth. Ray can see the wink of his teeth. There are little bits of coconut caught in his whiskers. That

shouldn't be funny, but it is. Not funny enough to laugh at, but funny.

"Biz, old buddy," he says. "I'm sorry. I forgot you were in here."

Great sadness and amusement sweep over him as he looks at the baked Jack Russell. That anything so sad should be funny is just a crying shame. (73)

Ray は Biz の死を悲しんではいるが、同時にそれを面白いとも思っている。このような状況で面白いと感じる自分のことを情けないとは思うのだが、そこには Biz の死に対する責任を感じている様子は同えず、テキスト全体を通して Ray の意識と限りなく近い語りは "he looks at the baked Jack Russell" と、遂にはこの悲惨な死を遂げた犬のことを、Biz という名前で呼ぶことすらしていないのである。

これまで見て来た通り、Biz は飼い犬として人間中心の世界に存在し、人間の不注意と身勝手によりその命を奪われるのである。

"Premium Harmony" のテキスト分析を、「行き過ぎた人間中心主義の結果が Biz の死を招いた」とまとめるにあたって、パトリック・ロレッドが『ジャック・デリダ 動物性の政治と倫理』第一章「肉食－ファロース－ロゴス中心主義」でまとめているデリダの動物の死に関する考察を紹介したい。

動物を殺すことの根本的な意味はまさに、それが擬人的な意味での死として現れないということ、そしてより根底的には、人間にとっての合法性のあらゆるしるしを示しているということである。デリダの脱構築はそのような殺生を認可する諸言説の「供犠的構造」を明らかにしようとするのだが、この構造はわれわれの肉食的社会の死活に関わるほどに重要な二重の機能を保証するものである。すなわち、一方では、人間中心主義化された道徳的かつ法的な法則へと動物の死を強制的に組

み込むことによって、この死を主権的に認可する機能があり、他方では、供犠という行為そのものの暴力的な性質の否認を可能とする機能がある。(24)

"Premium Harmony" の中で、流石に犬が食べられることはないが、犬の命を人間の不注意で奪ってもその人間が罪に問われることもなければ、責任を取らされることもないということは、「人間中心主義化された道徳的かつ法的な法則へと動物の死を強制的に組み込むこと」と同等のことではないだろうか。

#### 4. まとめ：「ポスト・リーマンショック文学」に戻って

リーマンショックは何故起こったのか。それは、過剰な規制緩和、サブプライム住宅ローンに代表される複雑なデリバティブ商品、そして金融危機を回避出来なかった（正しくは回避しようとしなかった）政治家や学者などの専門家たちのせいである。しかもこれらの金融危機を招いた専門家たちは誰も責任を問われることはなかったのだ。(映画『インサイド・ジョブ』に詳しい。)

人間が作り出したにも関わらず、人間のコントロールが及ばない程に巨大化、複雑化した金融システムとその破綻。そして、これにより、個人("Premium Harmony" の場合は犬も含む)の人(犬)生が、短時間で激変する様が、"Premium Harmony" には描かれているのだ。

今日、株価は1000分の1秒の単位で、アルゴリズムにより管理されているというが、しばしば株の乱高下が起こるのは、このアルゴリズムによるコントロールの破綻が原因である。人間が作り出した計算式で、完全にコントロール出来るはずであるのに、実際はそれが出来ていないのである。

行き過ぎた人間中心主義、人間が人間の作り出したものをコントロールできなくなっている21世紀の世界が、"Premium Harmony" のアメリカの片田舎の一組の夫婦とその飼い犬の人(犬)生の中に描かれているのである。リーマンショック

から10年の今年、この作品を「ポスト・リーマンショック文学」として再読し、あの金融危機は何であったのかを再考すべき時なのではないだろうか。

## Bibliography

- Cronenberg, David, dir. *Cosmopolis*. eOne Films, 2012.
- DeLillo, Don. *Cosmopolis*. New York: Scribner, 2003.
- Ferguson, Charles, dir. *Inside Job*. Sony Pictures Classics, 2010.
- King, Stephen. "Premium Harmony". *The New Yorker*. 9 Nov. 2009: 68-73.  
(<https://www.newyorker.com/magazine/2009/11/09premium-harmony>)
- 青木耕平. 「文学と映画」. 『EYESCREAM』 Dec. 2017: 47.
- 上岡伸雄. 『テロと文学 9.11後のアメリカと世界』. 東京: 集英社, 2016.
- デリダ, ジャック著, マリ＝ルイーーズ・マレ編. 『動物を追う, ゆえに私は(動物で)ある』. 鶴飼哲訳, 東京: 筑摩書房, 2014.
- ドゥールーズ, ジル, フェリックス・ガタリ. 『千のプラトー』. 宇野邦一, 小沢秋広, 田中敏彦, 豊崎光一, 宮林寛, 守中高明訳, 東京: 河出書房, 1994.
- 藤井光. 『ターミナルから荒地地へー「アメリカ」なき時代のアメリカ文学』. 東京: 中央公論新社, 2016.
- 四方田犬彦. 『犬たちの肖像』. 東京: 集英社, 2015.
- 「リーマンショック 10年危機がまた来る」. 『ニューズウィーク日本版』. 25 Sept. 2018. 17-29.
- 「リーマン 10年危機後の世界」. 『産経新聞』 12 Sept. 2018.
- レヴィ＝ストロース, クロード. 『野生の思考』. 大橋保夫訳, 東京: みすず書房, 1987.
- ロレッド, バトリック. 『ジャック・デリダ 動物性の政治と倫理』. 西山雄二, 桐谷慧訳, 東京: 勁草書房, 2017.
- 若島正編. 『ベスト・ストーリーズⅢカボチャ頭』. 東京: 早川書房, 2016. 321-339.